慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | シジウィックによるミル「功利主義」の批判について |
| Sub Title | Sidgwick's criticism on Mill's "utilitarianism" |
| Author | 水野, 俊誠(Mizuno, Toshinari) |
| Publisher | 慶應義塾大学倫理学研究会 |
| Publication year | 2016 |
| Jtitle | エティカ (Ethica). No.9 (2016. ) ,p.31- 64 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20160000-0031 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# シジウィックによるミル「功利主義」の批判について

水 野 俊 誠

## はじめに

ミルは、功利主義に関連して、質的快楽主義、心理的快楽主義、功利の原理の証明について述べている[1]。

第一に、質的快楽主義とは、快楽の価値はその量と質の両方によって決まるという見解である。ミルは、快楽の価値はその量によって決まるというベンサムの見解を批判し、それに代わるものとして質的快楽主義を提案している[2]。

第二に、ミルは、『功利主義論』第 4 章第 10 段落で、次のように述べている。「あるものを欲することと、それが快いと見なすこととは、……まったく切り離せない現象であり、あるいはむしろ同一の現象の二つの部分である。より厳密な言葉でいえば、同一の心理的事実の二つの名付け方である」（CW 10.237）、と。それゆえ、彼は、人は（目的として）快楽のみを欲するという心理的快楽主義を採用しているといえる。

第三に、ミルは功利の原理の証明を試みている。より正確に言えば、功利の原理の基盤となる、幸福だけが目的として望ましいものであるという学説の証明を試みている。だが、それは推論による普通の意味での証明ではない。というのは、究極目的に関する学説は、受け入れられるか拒否されるかであり、推論による証明になじまないからである。ミルの言う証明とは、知性ある人がその学説に対して同意するかしないかを決定できる

ために十分な考慮事項を示すという広い意味での証明である。

ミルによる上述の三つの見解を、シジウィックは批判している。本稿では、まず、この批判を概説する。その後、この批判の妥当性を検討したい。

## 第1節　シジウィックによる批判

シジウィックは、前節で見たミルの質的快楽主義、心理的快楽主義、功利の原理の「証明」を批判している[3]。それらの批判について、順に見ていくことにしたい。

### 質的快楽主義

ミルに対するシジウィックによる第一の批判は、質的快楽主義に関わるものである。この点について、第一に、シジウィックは、『倫理学の方法』第1編第7章で次のように述べている。

> ジョン・スチュアート・ミルは、ベンサムの学説の自らによる展開の中で、上述の立場を放棄して、程度の差と同じように快楽の質の差も考慮に入れることが望ましいと考えた。……快楽を合理的行動の唯一の究極目的と見なす方法を整合的に用いるためには、ベンサムの命題が認められ、快楽のすべての質の比較が現実に量の比較に還元されなければならないように、私には思われる。というのは、すべての快楽は、快さという共通の特性を持つがゆえにそう呼ばれ、だからこそこの特性に関して比較されうるからである。それゆえ、我々が求めているものが快楽そのものであり、快楽だけであるとすれば、我々は一層快くない快楽よりも一層快い快楽を、明らかに常に選好しなければならない。我々が快楽以外のものを目指していないとすれば、他のいかなる選択も合理的でないように思われる。あ

> る種の快楽が他の種の快楽よりも善い――たとえば相愛の快楽は満たされた欲望の快楽よりも質の点で優れている――と言うとき、我々は、ある種の快楽が一層快いということをしばしば意味している。なるほど我々は他のこと、たとえば、ある種の快楽は一層快くないけれども一層高貴で上品であるということを意味するかもしれない。だが、そのとき我々は、明らかに、選好の非快楽主義的な根拠を持ち込んでいる。もしこのことが行われるならば、採用された方法は直観主義と快楽主義との複雑な混合物であろう（ME 94）。

快楽主義の方法を整合的に用いるためには、快楽の質の差をその量の差に還元しなければならない。つまり、一方の快楽が他方の快楽より質の点で優れているということは、前者の快楽が後者の快楽よりも一層快いということを意味するのでなければならない。ミルのように、一方の快楽は他方の快楽より快くないが質の点で優れているという理由で前者を選ぶとすれば、快楽主義の中に、それと整合しない非快楽主義的な要素を持ち込むことになる。

第二に、シジウィックは、『倫理学の方法』第 2 編第 1 章で次のように述べている。

> ［可能な最大の幸福という］目的のこの量的な定義［苦痛に対する快楽の、獲得可能な最大の剰余］が受け入れられるとすれば、快楽はそれらの快さに比例して追求されるべきであり、それゆえ、一層快くない意識は、それが持ちうる何か他の性質に基づいて一層快い意識より選好されてはならないということを、整合性が要求する。ミルや他の論者が主張する質の区別は、選好の根拠として依然として認められうるが、量の区別に帰されうる限りでのみそうである。これは、我々があらゆる曖昧な不整合を厳密に排除するときに、利己主義的と普通呼ばれる実践的な推論が合致する傾向を持つ類型であ

る。（ME 120-1）（［ ］は引用者）

快楽主義の方法を整合的なものにするためには、快楽は、もっぱらその快さの量に比例して選好されなければならない。それゆえ、ミルが主張する快楽の質の区別は、その量の区別に還元されなければならない。

上の一節に関わって、シジウィックは『倫理学の方法』第 2 編第 2 章で以下のように述べている。

> ある種の快楽が他の種の快楽より快くはないが、質の点で優れていると判断されるときに選好されているのは、本当は、感情そのものではなく、我々の普通の思考によって認識可能な対象と見なされる、その感情が生じる身体的あるいは精神的な状態、または関係における何かであると、私は結論すべきである。というのは、確かに、私が思考において、何らかの感情を、そのあらゆる状態や付随物から、――そしてまた、同一の個人や他の人の、後続する感情に対するその効果から――区別し、それを、単一の主体の一時的な感情としてのみ考えるならば、その感情の中に、その程度が感覚を有する個人によってのみ直接的に認識されうる、我々が快さと呼ぶもの以外の望ましい性質を見出すことは、不可能であるように思われるからである。（ME 128）

ある快楽が他の快楽よりも質の点で優れていると判断されているときに選好されているのは、感情そのものではなく、その感情が生じる状態または関係、その感情に後続する結果などである。ある感情を、それ自体として考えれば、その中に見出される望ましい性質は、快さという量しかない。それゆえ、快楽の質の差は、その量の差に還元されなければならない。

第三に、シジウィックは、『イギリスの読者のための倫理学史の概要』第 4 章第 16 節で次のように述べている。

> ストア派的な要素とエピクロス的な要素とのこの奇妙な混合――エピクロス主義が個人の善の定義を与え、ストア派的な気分が個人の善を獲得する最善の見込みを与えると認められること――は、ミルがベンサムに反対して支持しているもう一つの立場と結び付けられるだろう。その立場とは、量の差から区別され、それを乗り越える快楽の質の差の承認である。質の差のこの承認は、常識と調和する点で、快楽を義務の基準として採用するためにいくらか有効だが、その利点は、整合性を犠牲にして得られる。というのは、二つの快楽のうちで、より少ない快楽を、それが質の点で優れていることに基づいて選択する人が、「最大の」幸福または快楽を自らの選好の基準と見なしていると、どのような意味で主張されうるのかを理解するのは困難だからである。(OHE 236)

二つの快楽のうちより少ない方を、それが質の点で優れているという理由で選択することは、最大の幸福すなわち快楽を自らの選好の基準と見なすことと整合しない。

まとめると、ミルの質的快楽主義に対するシジウィックによる批判は、第一に、一方の快楽は一層快くないが質の点で優れているという理由で後者を選ぶとすれば、快楽主義の中に、それと整合しない非快楽主義的な要素を持ち込むことになるというものであり、第二に、二つの快楽のうちより少ない方を、それが質の点で優れているという理由で選択することは、最大の幸福すなわち快楽を自らの選好の基準と見なすことと整合しないというものである[4]。

### 心理的快楽主義

ミルに対するシジウィックによる第二の批判は、心理的快楽主義（すなわち「意志が、現実的な快苦または予想される快苦によって常に決定されるという見解」(ME 40)）に関わるものである。この点について、シジ

ウィックは、『倫理学の方法』第6版の序で、以下のように述べている。

> バトラーの影響の結果は、ミルから離れたさらなる段階に私を導いた。というのは、私は、その結果によって、心理的快楽主義の学説を放棄し、行為の「無私な」あるいは「他に関わる」衝動、すなわち当該の行為者の快楽に向けられていない衝動の実在を認識することに行き着いたからである（『倫理学の方法』第1編第4章、参照）。事実、私が倫理学の心理的基礎と呼ぶものに関して、私は、自分自身がミルよりもバトラーに一層同意するということに気付いた。（ME xxi）

ミルは心理的快楽主義を支持している。他方、バトラーは、心理的快楽主義を否認している。シジウィックは、初めはミルの立場を支持していたが、後にバトラーの立場を支持するようになった。

上述の点に関わって、シジウィックは、『倫理学の方法』第1編第4章で、さらに詳しく述べている。そこで、彼はまず、「快楽と苦痛を目的としない欲求や衝動は無いのか、つまり、行為者自身の感情以外の結果をもたらすか回避する意識的な衝動は無いのか」という問いを立てる。そして、この問いに対するミルの答えについて、以下のように説明している。

あるものを欲することと、それが快いと見出すことは、同一の心理的事実の二つの名付け方であるとミルは述べている。この命題は、「快楽」あるいは「快い」という言葉の二つの意味のどちらを採用するかによって、トートロジーになったり、そうならなかったりする。第一に、「快楽」あるいは「快い」という言葉が、「選択に影響を与え、意志に対してある魅力的な力を行使するもの」を意味するとすれば、上の命題は、トートロジーになる。というのは、あるものを欲するとは、それが選択と意志に影響を与えるということに他ならないからである。第二に、快楽という言葉が、『倫理学の方法』第1編第4章第2節で暫定的に定義されたもの、すなわち「意志を、それを維持するかもたらす――それが現実にあるならば維持

し、それが観念において表象されるだけであれば、それをもたらす――傾向を持つ行為へと刺激する類の感情」（ME 42）を意味するとすれば、上の命題はトートロジーではなく、論争の余地のあるものになる。というのは、上のように、快楽が単に欲されるものを意味するのではなく感情と明確に規定されているからである。ミルは、第二の意味で解された先の命題を、非常に明らかなので、ほとんど異議を唱えることができないものと見なしている。つまり、ミルの考えによると、人は、快楽以外のものを欲することができない。

これに対してシジウィックは以下のように述べている。

> 非常に明らかなので、我々の意識的経験の普遍的な事実であるだけでなく、必然的な真理でさえあると、ミルが考えるのと正反対のことを、イギリスのモラリストの中で最も有名な人が考えているということを見出すのは、かなり奇妙である。バトラーは、周知のように、自己愛、あるいは我々自身の快楽に向かう衝動を、「個々の外的対象――名誉、権力、他人の害悪や善――に向かう動き」から区別している。……そのような個々の情念あるいは欲望は、「利害関心のある追求という観念そのものによって必然的に前提される」と、彼は続けていう。「というのは、利益や幸福という観念そのものが、このこと、すなわちある欲望あるいは情愛がその対象を持つということに存するからである」。我々が、快楽以外のものへの欲求を持たないとすれば、快楽を追求することはまったくできないだろう。というのは、快楽とは、まさにこれらの「無私の」衝動の充足に存するからである。（ME 44）

バトラーの考えによれば、人は快楽を欲するのではない。個々の外的対象への欲求を満たすことによって、二次的に快楽を得るのである。この見解について、シジウィックは次のように述べている。

> 私自身の経験に関わる限り、バトラーは、自らの主張を確かに誇張している。というのは、多くの快楽――とりわけ、多くの情緒的快楽並びに視覚、聴覚、嗅覚の快楽――は、先行する欲求へのいかなる知覚可能な関係もなく私の心に浮かび、我々の一次的な欲求は、これらのような快楽にもっぱら向けられうるということは、完全に考えられるように思われるからである。だが、事実の問題として、自らの感覚的、情緒的、知的な衝動の全範囲を通じて、私は、その対象が自分自身の快楽以外のものである欲求を、区別することができるように思われる。（ME 44-5）

多くの感覚的、情緒的な快楽は、先行する欲求とは無関係に享受される。しかしながら、人が、自己の快楽以外のものを欲するということはやはり事実である。

その例としてシジウィックは、空腹の欲望や追求されるものへの欲望を挙げている。そして、後者の例として、ゲームにおける勝利への欲求、仕事における目標達成への欲求、徳への欲求などを挙げている。まず、空腹の欲望について、シジウィックは『倫理学の方法』第1編第4章で次のように述べている。

> 私が観察できる限り、空腹の欲望は、食物を食べることへの直接的な衝動である。そのような食べることは、多かれ少なかれ強い快い感情をおそらく普通は伴う。だが、この快い感情が空腹の対象であり、空腹な人の意志そのものを刺激するのはこの快楽の表象であると、厳密に言われることはできないと私は考える。もちろん、空腹は、食べることの快楽の期待をしばしば自然に伴うが、注意深い内観は、その二者が決して分離不可能ではないということを示すように思われる。そして、それらが一緒に起きるときでさえ、その快楽は、その一次的な欲望の対象ではなく、その一次的な欲望から区別

> されうる二次的な欲求の対象であるように、当然思われる。というのは、この二次的欲求が強い美食家は、この二次的欲求によって、空腹を刺激することをもくろむ行為へとしばしば促され、この二次的欲求を満たす過程を引き延ばし多様にするために、その一次的衝動を統制することに、再び、しばしば行き着くからである。（ME 45）

食物を食べることを対象とする空腹の欲望が[5]、一次的な欲求である。そして、この欲求は、食べることの快楽を対象とする二次的な欲求から区別されうる。それゆえ、空腹の欲望は、自己の快楽以外のもの、すなわち食物を食べることを対象とする欲求であるといえる。

次に、シジウィックは、追求されるものへの欲求について、『倫理学の方法』第 1 編第 4 章で次のように述べている。

> 実際、欲求を本質的な要素とする、熱心な活動の意識によって与えられる快楽は、生の享受全体の中で重要な項目を成す。我々が追求の快楽と一般に呼びうるそのような快楽は、獲得の快楽よりも重要であり、多くの場合、我々を追求に従事する気にさせるのは、獲得の快楽の見込みよりも追求の快楽の見込みであると言うことは、ほとんどありふれている。そのようなケースで、追求される対象を獲得する欲求を、獲得の快楽への欲求から区別することは、とりわけ容易である。というのは、獲得が快くなると予想されるのは、追求自体が追求されるものへの欲求を刺激するからでしかないからである。（ME 46-7）

追求自体が、追求されるものへの欲求を刺激する。その後、そのものを獲得する快楽への欲求が二次的に生じる。それゆえ、追求されるものへの欲求を、それを獲得する快楽への欲求から区別することは容易である。

追求されものへの欲求の例としてシジウィックが挙げているのは、ゲ

ームにおける勝利への欲求である。

> たとえば、――大多数のゲームがそうであるように――勝利への競争を含む何らかのゲームのケースを取り上げよう。普通の競技者は、そのような競争に参加する前には、それにおける勝利への欲求を持たない。実際、彼は、自分がその競技に現実に参加する前には、そのような勝利から満足を引き出すと想像することが困難であるとしばしば気付く。そのゲームが始まる前に、彼が熟慮の上で欲するものは、勝利ではなく、勝利への奮闘の快い興奮である。この快楽の十分な発展のためにのみ、そのゲームで勝利する一時的な欲求は、一般的に不可欠である。当初は存在しないこの欲求は、その競争自体によって、かなりの強さまで刺激される。そして、この欲求がこのように刺激されるのに比例して、単なる競争は一層快いものになり、元来は善くも悪くもなかった勝利は、強い楽しみを与えるようになる。(ME 47)

ゲームに熱中すると、勝利のために奮闘する快楽への欲求とは別に、勝利への欲求が生じる。勝利への欲求が強くなると、勝利の獲得は一層多くの快楽をもたらすようになる。このように、追求されるものへの欲求の一種である勝利への欲求は、快楽への欲求とは別のものである。それゆえ、人は快楽以外のものを欲すると言える。

さらに、シジウィックは、すぐ後で次のように述べている。

> 我々が快楽の追求を考えるとき、我々はこの両立不可能性をある範囲で知覚するように思われる。すなわち、十分な楽しみを得るために、利己心の、ある従属が必要であるように思われる。自らの主要な意識的目的を自分自身の快楽に絶えず固定することによってどこでもエピクロス主義的な気分を維持する人は、競争の十分な精神を捉えない。彼の熱意は、その快楽に最高の興奮を与えるまさに鋭さ

> を決して獲得しない。ここで、快楽へ向かう衝動は、支配的であり過ぎると、それ自身の目的を損なうという、快楽主義の根本的逆説と我々が呼びうる見解が現れる。この効果は、受動的な感覚的快楽のケースでは見えないか、いずれにしてもほとんど見えない。だが、我々の能動的な楽しみについては、一般に、それらが伴う活動が「肉体的なもの」として分類されるか「知的なもの」として分類されるかにかかわらず、（多くの情緒的快楽と同様に）我々が自らの主要な意識的目的をそれらの楽しみに集中させる限り、少なくとも最高度にそれらを得ることはできないと確実に言われるだろう。（ME 48-9）

追求のケースで、快楽への欲求と追求されるものへの欲求とは両立不可能である。快楽への欲求を直接的に満たそうとすれば、それを満たすことはできない。追求されるものへの欲求を満たすことによって、快楽への欲求は間接的に満たされる。こうした事態を、シジウィックは快楽主義の逆説と呼ぶ。

そして、シジウィックは、『倫理学の方法』第 1 編 4 章第 3 節で次のように述べている。

> これまで、「自己に関わる」衝動と「他に関わる」衝動との感じられた両立不可能性を、両者の本質的な区別を証明する方法としてのみ主張することに関心を集中してきた。（ME 51）

自己に関わる衝動すなわち快楽への欲求と、他に関わる衝動すなわち追求されるものへの欲求とは、追求のケースでは両立不可能である。この両立不可能性は、両者の間に本質的な区別があることの証拠になる。

さらにシジウィックは、『倫理学の方法』第 1 編 4 章第 3 節の末尾で次のように述べている。

> まとめると、我々の意識的で能動的な衝動は、自分自身にとっての快楽の獲得や苦痛の回避に決して常に向けられないので、我々は、意識の中のどこにでも、快楽でも苦痛の回避でもない何かに向けられた他に関わる衝動を見出すことができる。そして実際、我々の快楽の最も重要な部分は、そのような衝動の存在に依存する。他方、それらの他に関わる衝動は、多くのケースで我々自身の快楽への欲求と決して両立しないので、その二種類の衝動は意識の同一の瞬間に容易に共存しない。そして、一層時折（だが決してまれにではなく）その二者は妥協不可能な対立に陥り、行為の対立する道筋へと駆り立てる（ME 52）。

第一に、自己の快楽以外の何かに対する衝動・欲求が存在する。第二に、自己の快楽以外の何かに対する衝動・欲求は、自己の快楽に対する衝動・欲求と時に両立不可能である。たとえば、「徳そのもののための徳への愛」は、徳の快楽への欲求と両立できない。

以上で見たように、ミルの心理的快楽主義に対するシジウィックによる批判は、自己の快楽以外の何かに対する欲求が存在するというもの、および、自己の快楽以外の何かに対する欲求は、自己の快楽に対する欲求と時に両立不可能であるというものである。

**功利の原理の「証明」**

ミルに対するシジウィックによる第三の批判は、功利の原理の「証明」に関わるものである。ミルによる功利の原理の「証明」は、（1）各人の幸福は各人にとって望ましい、（2）社会全体の幸福は望ましい、（3）幸福だけが望ましいという三つの命題から成る。ここでは、後述のシジウィックによる批判の対象となる、初めの二つの段階について述べる。

（1）ある物体が見えるということに対して与えうる唯一の証拠は、人々がそれを実際に見ているということである。同様に、あるものが望ま

しいということを示しうる唯一の証明は、人々が実際にそれを望んでいるということである。そして、各人は、自らの幸福を望んでいる。それゆえ、各人の幸福は各人にとって望ましい。

（2）なぜ社会全体の幸福が望ましいのか、ということに対して与えうる理由は、各人が、獲得できると信じている限り、自分の幸福を望んでいる、ということ以外にはない。しかしながら、このことは事実であるから、幸福が善であるということ、すなわち各人の幸福は当人にとって善であり、それゆえ、社会全体の幸福はすべての人の総体にとって善であるということについて、我々は、事情が許す限りでの証明だけでなく、要求できるすべての証明も手に入れている。

上の「証明」について、シジウィックは、『倫理学の方法』第 1 編第 6 章で、以下のように述べている。

> ベンサムあるいは彼の弟子は、さらに進んで、自らが是認し教え込む普遍的快楽主義を、自らが不可避なものとして受け入れる利己的快楽主義に基づけようとするだろうと、おそらく予想されたのだろう。だからこそ、J. S. ミルは、ベンサムと共通して主張する、心理学的原則と倫理学的原則との論理的関連を確立しようとし、各人は自分自身の幸福を自然に追求するがゆえに、他の人々の幸福を追求すべきであると、読者を説得しようとするのである。（ME 85）

ミルは、各人は自分自身の幸福を追求するという心理的快楽主義に基づいて、他の人々の幸福を追求すべきであるという倫理的快楽主義を主張している。

シジウィックは、上の一節に付けた注で、「我々は、この点に関するミルの議論を考察する機会を、後の章で設けるつもりである。本書第 3 編第 13 章、参照」と付記している。そして、『倫理学の方法』第 3 編第 13 章で次のように述べている。

> 先に見たように、功利の原理がミルによって提示されたのは、「正・不正の基準」あるいは「行為の指導規則」としてである。そこから、この原理の言明として、「社会全体の幸福が望ましい」と彼が述べるとき、社会全体の幸福は、各人が望むべきもの、あるいは少なくとも――「べき」という言葉の一層厳密な意味で――行為において実現することを目指すべきものであるということを、彼は意味すると理解されなければならない（そして、彼の論文全体が、彼が実際にそれを意味していることを示す）。だが、現実に欲されるものがこの意味で望ましいと正当に推論されると我々が認めるとしても、この命題は、ミルの推論によって確立されない。というのは、現実の欲求の総和は、それぞれの欲求が社会全体の幸福の異なる部分に向けられているので、何らかの個人の中に存在する、社会全体の幸福への現実の欲求を構成しないからである。そして、何らかの個人の中に存在しない欲求が、個人の集まりの中に存在しうると、ミルが主張しないのは確実だろう。それゆえ――この推論に関する限り――社会全体の幸福への現実の欲求は存在しないので、社会全体の幸福が望ましいという命題は、この方法で確立されることができない。（ME 388）

仮に、現実に欲されるものは望ましいとしても、各人は自分自身の幸福を欲するという心理的利己的快楽主義に基づいて正当化できるのは、各人は自分自身の幸福を欲すべきであるという倫理的利己的快楽主義である。他方、各人は社会全体の幸福を欲すべきであるという倫理的普遍的快楽主義を正当化するためには、各人は社会全体の幸福を欲するという心理的普遍的快楽主義が成り立つ必要がある。しかしながら、各人の欲求の対象は、社会全体の幸福ではなく、社会全体の幸福の様々な部分、たとえば自己の幸福や家族、友人の幸福などであるから、社会全体の幸福への欲求は、いかなる個人の中にも、個人の集まりの中にも存在しない。つまり、心理的

普遍的快楽主義は成り立たない。それゆえ、心理的利己的快楽主義に基づいて倫理的普遍的快楽主義を正当化しようとするミルの議論はうまく行かない。

加えて、シジウィックは、上の一節のすぐ後の段落で、次のように述べている。

> 功利主義は、本当に自明な第一原理への要求が厳密に解釈されるときに、直観主義が移行する傾向を有する最終的な形としてこのように［明瞭で確実な倫理的直観の探究において、合理的仁愛の格率、正義の格率などを基本原則とするものとして：引用者］提示される。しかしながら、この移行を論理的に完全なものにするために、我々は、「普遍的善」を「普遍的幸福」として解釈する必要がある。そして、この解釈は、私の考えでは、幸福が人間の有する現実的欲求の唯一の対象であるという心理学的事実から、幸福のみが望ましいあるいは善いという倫理学的結論へと、ミルのように論じることによって正当化されることはできない。というのは、本論の第 1 編第 4 章で、幸福あるいは快楽は、各人が自分自身のために現実に欲する唯一の対象ではないと、私は示そうと試みたからである。思うに、究極的善と幸福との同一視は、次章で私が説明しようと努める、一層間接的な推論の方法によって適切に達成される。（ME 388）

ここでシジウィックは、心理的快楽主義に基づいて倫理的快楽主義を正当化できない理由として、自己の快楽は欲求の唯一の対象ではないということ、すなわち心理的快楽主義が誤りであるということを挙げている。

さらに、シジウィックは、『倫理学の方法』第 4 編第 1 章で以下のように述べている。

> この後者の［自発的行為においてすべての行為者は、普遍的にあるい

> は通常は自分自身の個人的な幸福または快楽を追求するという：引用者］命題と何らかの倫理理論との間にはどのような必然的な関係もないように思われる。だが、心理的快楽主義から倫理的快楽主義へ移行する自然な傾向がある限り、その移行は――少なくとも第一次的には――後者の利己主義的な段階へのものでなければならない。というのは、明らかに、すべての人が現実に自分自身の幸福を追求するという事実から、すべての人が他の人々の幸福を追求すべきであると、我々は直接的で明白な推論として結論できないからである。（ME 412）

シジウィックの考えでは、第一に、すべての行為者は自分自身の快楽を追求するという心理的快楽主義と、倫理的快楽主義を含むあらゆる倫理理論との間に必然的な関係は無い。それゆえ、心理的快楽主義に基づいて、倫理的快楽主義を正当化することはできない。第二に、仮に心理的利己的快楽主義に基づいて倫理的快楽主義を正当化できると仮定しても、その倫理的快楽主義は、他人の幸福を追求すべきであるという普遍的快楽主義ではなく、自己の幸福を追求すべきであるという利己的快楽主義でなければならない。というのは、心理的利己的快楽主義に基づいて、倫理的普遍的快楽主義を正当化することはできないからである。

まとめると、ミルによる功利の原理の「証明」に対するシジウィックによる批判は、以下のものであると言える。すなわち、（１）心理的快楽主義はそもそも誤りである、（２）心理的快楽主義と、倫理的快楽主義を含むあらゆる倫理理論との間にはいかなる必然的な関係も無い、（３）仮に、心理的快楽主義に基づいて倫理的快楽主義を正当化できるとしても、倫理的普遍的快楽主義を正当化するために必要な前提は、心理的利己的快楽主義ではなく、心理的普遍的快楽主義である。しかしながら、心理的普遍的快楽主義は成り立たない。以上から、心理的快楽主義に基づいて倫理的快楽主義を正当化する、ミルによる功利の原理の「証明」はうまく行かないと言える。

## 第２節　シジウィックによる批判の評価

前節で見た、シジウィックによる批判の妥当性を検討することにしたい。結論を先取りすれば、ミルの質的快楽主義と心理的快楽主義は、シジウィックによる批判に応えることができるが、ミルによる功利の原理の「証明」は、シジウィックによる批判に応えることができないと論じる。

**質的快楽主義**

前節で見たように、ミルの質的快楽主義に対するシジウィックによる批判は、第一に、一方の快楽は他方の快楽より量の点で快くないが質の点で優れているという理由で前者を選ぶとすれば、快楽主義の中に、それと整合しない非快楽主義的な要素を持ち込むことになるというものであり、第二に、二つの快楽のうちで、より少ない方を、それが質の点で優れているということに基づいて選択することと、最大の幸福（快楽）を選択の基準と見なすこととは整合しないというものである。これらの批判は妥当なものであろうか。

第一の批判について。ミルは、『功利主義論』第 2 章第 4 段落および第 5 段落で次のように述べている。

> これまで知られているエピクロス主義的な人生観で、知性の快楽、感情と想像力の快楽、道徳感情の快楽に、単なる感覚の快楽をはるかに上回る快楽としての価値を割り当てていないものはない。……ある種類の快楽は他の種類の快楽に比べて一層望ましく価値があるという事実を認めることは、功利の原理と十分に両立できる。快楽以外のあらゆるものを評価する時には、量のほかに質も考慮されるのに、快楽の評価は量だけに基づくと考えるのは道理に合わないだろう。
>
> 快楽における質の相違ということで私が何をいいたいのか、あるいは、量が多いということを別にして、単に快楽として、一方の快楽を

> もう一方の快楽よりも価値があるものにするのは何かと尋ねられたら、可能な答えは一つしかない。（CW 10.211）［強調は引用者］

ミルは、快楽の質や量と快楽の価値とを区別している。そのうえで、快楽の価値は、その質と量の両方を考慮に入れて評価すべきであると述べている。それゆえ、ミルの考えでは、快楽の質と量の両方が、快楽の価値をもたらす。

そして、精神的な快楽と肉体的な快楽との間には質の相違があり、それらの価値は、質と量によって決まる。こう述べることは、幸福が快い経験に存し、これらの経験が善いのはそれらが快いからであるという完全な形の快楽主義とまったく矛盾しない。それゆえ、シジウィックによる第一の批判は成り立たないと言える[6]。

第二の批判について。ミルは『功利主義論』第 2 章第 5 段落で次のように述べている。

> 二つの快楽の両方をよく知っている人々が、一方をもう一方よりもはるかに上位に置き、一層大きな不満足を伴うと知っていてもそれを選好し、自らの本性が受容可能ないかなる量のもう一方の快楽と引き換えにも、もとの快楽を放棄しようとしなければ、我々はその選好された楽しみに、比較するときに量を取るに足らないものにするほど量を圧倒する、質の優位を帰すことが正当である。（CW 10.211）

量が少なく質が高い快楽を、量が多く質が低い快楽よりも選択することは正当であると、ミルは述べている。それゆえ、ミルは、二つの快楽のうちで量の点でより少ない方を、それが質の点で優れているということに基づいて選択すると考えられる。

他方、ミルは、『功利主義論』第 2 章第 9 段落で、「功利主義的な基準は、行為者の最大幸福ではなく、総計としての幸福の最大量である……」

（CW 10.213）と述べている。また、『功利主義論』第 2 章第 17 段落で、「功利主義の道徳は、……幸福の総量を増やす傾向を持たない犠牲を無駄だと見なす」（CW 10.218）と述べている。それゆえ、ミルは、最大量の幸福（快楽）を選択の基準と見なしていると言える。だとすれば、先に見たシジウィックによる批判は、妥当なものであるように見える。

だが、今しがた見た『功利主義論』第 2 章第 5 段落の一節（「二つの快楽の両方をよく知っている人々が、……」）で、ミルは行為者の幸福について述べているように見える。他方、『功利主義論』第 2 章第 9 段落の一節（「功利主義的な基準は、……」）、および、第 2 章第 17 段落の一節（「功利主義の道徳は、……」）で、ミルは当事者全員の幸福について述べているように見える。だとすれば、ミルは、行為者については、量が少なく質が高い快楽を、量が多く質が低い快楽よりも選択すべきであるという見解を、そして、当事者全員の幸福については、最大量の幸福（快楽）を選択の基準と見なすべきであるという見解を、それぞれ採用している。そのように両者を分けて考えれば、これら二つの見解は形式的には整合するように見える。

しかしながら、ミルは『功利主義論』第 2 章第 10 段落で次のように述べている。

> 「最大幸福原理」に従えば、先に説明したように、究極目的は、量と質の両方の点で可能な限り苦痛を免れ可能な限り豊かに享受する生存であり、（我々が考慮しているのが自分自身の善であろうと他の人の善であろうと）他のあらゆるものはこの究極目的に関連して望ましく、そしてそれのために望ましいのである」（CW 10.214）

行為者の幸福に関しても、当事者全員の幸福に関しても、幸福（快楽）の量と質の両方が考慮される。ミルはこう述べている。それゆえ、行為者自身の幸福に関しても当事者全員の幸福に関しても、ミルは、最大量の幸福

（快楽）を選択の基準と見なすべきであるという見解、および、量が少なく質が高い快楽を量が多く質が低い快楽よりも選択すべきであるという見解を採用していると言える。これら二つの見解は、シジウィックが批判したように整合していないように見える。

このことをどう理解したらよいのだろうか。ミルは、先に見たように、『功利主義論』第2章第4段落および第5段落の一節（「これまで知られているエピクロス主義的な人生観で……」）で、快楽の質や量と快楽の価値とを区別したうえで、快楽の価値は、その質と量の両方を考慮に入れて評価すべきであると述べている。それゆえ、ミルの考えでは、快楽の質と量が、快楽の価値をもたらす。

では、なぜ、ミルは、快楽の評価に質の概念を持ち込み、快楽の量とその価値とを区別するのであろうか。彼の考えでは、詩の快楽のような精神的快楽と、入浴の快楽のような身体的快楽（あるいは、家族との死別のような精神的苦痛と、歯痛の苦しみのような身体的苦痛）とは異質なので、両者の快さ（または苦しさ）を量の多寡だけで比較することはできない。そこで、両者の異質な快さ（または苦しさ）を比較するためには、快楽の価値という尺度上で、両者のそれぞれに対応する価値を確定し、それらの価値どうしを比較する必要がある。そのためにミルは、快楽の評価に快楽の質という概念を持ち込み、快楽の量と快楽の価値とを区別するのである[7]。

さて、ミルが最大化することを目指す快楽の量（amount）が、快楽の質と対比される快楽の量（quantity）だとすれば、ミルの言う功利の原理とは、正しい行為とは、快楽の量（quantity）を最大化するものであるというものになる。だとすれば、快楽の質や価値という概念は、何の働きも持たない余計なものになる。もしそうなら、ミルの議論は破綻していることになるだろう。だが、ミル自身はそう考えていない。だとすれば、どう考えているのだろうか。前者の量（ミルが最大化することを目指す快楽の量）とは、快楽の量（quantity）ではなく、快楽の価値であるとミルは考

えている。こう解釈すれば、前者の量（amount）すなわち快楽の価値の最大化を選択の基準とすることと、量（quantity）が少ないほうの快楽を、それが質の点で優れているという理由で選択することとは整合する。それゆえ、先に見たシジウィックによる批判は、妥当なものではないと言える。

これに対して、シジウィックの立場から、次のような反論が予想される。詩の快楽とプッシュピン遊びの快楽との両方を熟知する人が、詩の快楽を選ぶとすれば、それは詩の快楽のほうが快いからでなければならない。つまり、両方の快楽は、感情の快さという共通の性質を有するのだが、詩の快楽のほうがその性質をより多く有している。そして、両方の快楽を熟知している人が詩の快楽を選ぶとき、その選択の決め手となるのは快さの程度である。それゆえ、快楽の質の相違は、快さの程度という量の差に還元されている。

加えて、そもそも、感覚の激しさ（または穏やかさ）の程度は、快楽の価値を決定する要因にならない。というのは、高揚した快楽（たとえば、麻薬がもたらす快楽）が、穏やかな快楽（たとえば、読書の快楽）より大きいとは限らないからである。他方、快楽の量（quantity）は、快楽の価値を決定する要因の一つになる。それゆえ、快楽の量とは、感覚の激しさと持続時間との積ではなく、各時点における快さの程度と持続時間との積でなければならない。このように、快楽の量が快さの程度であるとすれば、（快楽の価値とは快さの程度に他ならないと考えられるので、）快楽の価値と快楽の量とは同じものになる。だとすれば、ミルの質的快楽主義は、ベンサムの量的快楽主義と同じものになる。

この反論に対してどう応えることができるだろうか。人は、その発達段階の初期に、快さを感覚と結び付いたものとして経験するので、快さの程度を、明るさの程度などと同じように基数的なものとして捉えるようになる。そして実際、快楽の価値が基数的なものだとすれば、快楽の価値と快さの程度を区別できないという上の反論が成り立つ。しかしながら、ミルは、快楽の価値を基数的なものではなく、序数的なものと捉えている[8]。

つまり、彼の考えによると、異質な二つの快楽のうち、どちらが高い価値を持つかは判定できるが、一方の価値が他方の価値より何倍高いかは判定できない。こう考えれば、快楽の価値とその量とは明確に区別できる。それゆえ、ミルの質的快楽主義は、量的快楽主義に帰すことができないものであると言える。

**心理的快楽主義**

前節で見たように、ミルの心理的快楽主義に対するシジウィックによる批判は、自己の快楽以外の何かに対する欲求が存在するというもの、および、自己の快楽以外の何かに対する欲求は、自己の快楽に対する欲求と時に両立不可能であるというものである。

第一の批判に対して、ミルの立場から、どのように応えることができるだろうか。まず、ゲームにおける勝利への欲求、徳への欲求などのような、追求されるものへの欲求について、ミルはどのように考えているのであろうか。この問いに答える手掛かりになるのは、『功利主義論』第 4 章第 5 段落の以下の一節である。

> 功利主義の学説によれば、徳は自然的に、初めから目的の一部なのではないけれども、そうなることができる。そして、利害関心を離れて徳を愛する人にとって、徳は目的の一部になっているのであり、幸福のための手段としてではなく、自らの幸福の一部として望まれ大切にされているのである。（CW 10.235）

ミルの考えでは、徳は、もともとは幸福（快楽）を得るための手段であり、そうでなければどうでもよいものである。だが、それがもたらす幸福と（観念）連合することによって、手段としてではなく、幸福の一部として望まれているようになる。そのとき、徳はそれ自体として望まれているが、徳の観念が快楽と（観念）連合して一体のものとなっているので、徳への

欲求は快楽への欲求から区別できない。金銭、権力、名声、健康についても、同じことが成り立つ。ミルは、ゲームにおける勝利について述べていないが、上述の議論を若干敷衍すれば、ゲームにおける勝利についても、同じことが成り立つと考えられる。それゆえ、勝利への欲求があるということは、人が快楽以外の何かを欲するということの証拠にならない。

次に、空腹のケースについて。シジウィックが述べているように、空腹な人の一次的な欲求の対象は、食べることであるように見える。しかしながら、空腹な人が食べることを欲するとき、その人にとって食べることは快いこと（あるいは苦痛からの解放をもたらすこと）として見えていなければならない。そうでないとすれば、彼が食べることを欲することはできないだろう。

このケースでは、ゲームにおける勝利のような、追求されるものへの欲求とは異なって、食物を食べることは、食物を食べることの快楽と、観念連合によって後天的に結び付くのではない。では、両者はどのように結び付いているのだろうか。これを知る手掛かりになるのは、『自伝』第 5 章第 4 段落の以下の一節である。

> 分析のまさに長所は、偏見のすべての結果を弱め打破する傾向を有することであり、偶然に付着しあっているだけの観念を、我々が精神的に分離できるようにすることである。我々が分析のおかげで、自然の中の永久的な継起、すなわち我々の意志や感情に依存することのない物事の間の真の関係、それによって多くの場合に、あるものが他のものから事実、切り離せなくなる自然法則に関する最も明確な知識を持つのでなければ、どんな観念連合であっても、この分解力に抵抗することはできない。この自然法則は、明瞭に知覚され想像によって理解されるのに比例して、自然の中で常に結び付いている物事に関する我々の観念を、我々の思考の中でますます密接に凝集させる。分析の習慣は、このように、原因と結果、手段と目的との間の観念連合を強

化することさえありうる……（CW 1.141,143）

分析の習慣は、自然の中の永続的な継起、あるいは物事の間の真の関係に基づく観念連合、自然の中で常に結び付いている物事に関する観念連合を、弱めず、むしろ強める。加えて、この習慣は、「純粋に生理的、肉体的な欲求や快楽」を弱めない（CW 1.143）。それゆえ、ミルの考えでは、純粋に肉体的、生理的な欲求や快楽は、それらの対象となる物事（事態や事物）と、後天的で人為的な観念連合の結果としてではなく、「自然的な紐帯」（CW 1.141）によって、自然の中で常に結び付いている。それゆえ、純粋な肉体的な欲求である空腹のケースで、食べることという物事（の観念）は、食べることの快楽と、観念連合によって後天的に結び付くのではなく、初めから自然的に結び付いているのである。

上述のように、空腹のケースでも、食べることの観念は、快楽（幸福）と一体のものになっているので、食べることへの欲求は快楽への欲求から区別できない。それゆえ、このケースも、人が快楽以外の何かを欲するということの証拠にならない。

これに対して、シジウィックの立場から次のような反論が考えられる。すなわち、空腹な人が欲しているのは、やはり快楽ではなく食べることである。快楽は、欲求の適切な対象（食物）とそうでない対象（たとえば石）とを見分けるためのヒントあるいは目印にすぎない、と。

上の反論に対して次のように応えることができる。第一に、上の反論が、欲求の事象自体の説明として正しいと認めるとしても、食べることという事態が実現すると、すぐさま快楽が伴う。そして、食べることの観念と快楽とが（観念）連合して、食べることは快楽と一体のものとなる。それゆえ、現象的には、食べることへの欲求は快楽への欲求から区別できない。第二に、上の反論が欲求という事象自体の説明として正しいのか、それとも、食べること（の観念）は食べることの快楽と初めから自然的に結び付いているので、食べることへの欲求は快楽への欲求から区別できない

のか（つまり、快楽に先行し、快楽を伴わない原初的な欲求は存在しないのか）は、経験的な証拠に基づいて答えるべき事実の問題である。そして、脳の快感（報酬）回路に関するいくつかの研究は、後者の見解を支持するように見える[9]。

つぎに、自己の快楽以外の何かへの欲求は、自己の快楽への欲求と時に両立不可能であるという、心理的快楽主義に対するシジウィックによる第二の批判に対して、ミルの立場からどのように応えることができるだろうか。

この問いに答える手掛かりになるのは、『功利主義論』第 4 章第 11 段落の以下の一節である。

> ありうる反論は、欲求が快楽と苦痛の除去以外の何かに究極的に差し向けられうるということではなく、意志は欲求とは異なるものだということであろう。つまり、堅固な徳を備えた人や目的が定まった他の人は、目的をもくろんでいるときに得られる快楽や目的の実現から引き出すことを期待している快楽について考えることなく目的を達成する。……能動的な現象である意志は受動的な感受性の状態である欲求とは異なるものである。……このように理解された意志と欲求の区別は、確実できわめて重要な心理学的事実である。この事実は、……我々がそれ自体としてもはや欲していないことを習慣から意志するということ、それを欲するのはそれを意志するからでしかないということにのみ存する。（CW 10.238）

欲求は受動的な感受性の状態であり、究極的には快楽に差し向けられる。他方、意志は能動的な現象であり、快楽以外の物事に差し向けられる。それゆえ、欲求と意志は異なるものである。

上の一節に鑑みれば、心理的快楽主義に対するシジウィックによる第二の批判に対して次のように応えることができるだろう。すなわち、快楽

以外の何かへの欲求が快楽への欲求と両立不可能に見えるケースで、その何かは欲されているのではなく意志されている。それゆえこのケースは、快楽以外への何かへの欲求と快楽への欲求とが両立不可能であるということの論拠にならない、と。

欲求と意志との上述の区別を、シジウィックは認めないかもしれない。しかしながら、人は自らの欲求に逆らって何かを意志する場合がある。たとえば、ある人は、眠りたいという欲求に逆らって、仕事のために早起きすることを意志するかもしれない。このようなケースに鑑みれば、上述の区別は、人間心理の自然な分節を捉えているように思われる。

まとめると、ミルの心理的快楽主義に対するシジウィックによる二つの批判、すなわち、自己の快楽以外の何かに対する欲求が存在するというもの、および、自己の快楽以外の何かに対する欲求は、自己の快楽に対する欲求と時に両立不可能であるというものは、どちらも十分なものとは言えない。

### 功利の原理の「証明」

前節で見たように、シジウィックがミルによる功利の原理の「証明」を批判する論拠は以下の三つである。すなわち、第一に、心理的快楽主義はそもそも誤りである。第二に、心理的快楽主義と倫理的快楽主義との間にいかなる必然的な関係もない。第三に、仮に、心理的快楽主義に基づいて倫理的快楽主義を正当化できるとしても、倫理的普遍的快楽主義を正当化するために必要な前提は、心理的普遍的快楽主義である。しかしながら、心理的普遍的快楽主義は成り立たない。

第一の論拠について。今しがた明らかにしたように、心理的快楽主義は誤りとは言えない。それゆえ、ミルによる功利の原理の「証明」が誤っているとする、シジウィックによる第一の論拠は成り立たないと言える。

第二の論拠について。この点に関わって、ミルは、『功利主義論』第 4 章第 1 段落で次のように述べている。

> 究極目的についての問題には一般に受け入れられている意味での証明の余地は無い。推論による証明ができないことはあらゆる第一原理に共通していることであり、行為の第一の前提だけでなく知識の第一の前提にも共通していることである。(CW 10.234)

功利の原理の「証明」は、推論による証明ではないとミルは述べている。それゆえ、彼は、人は現実に幸福を欲しているという事実から、人は幸福を欲すべきであると抽象的に推論しているのではない。

では、ミルは、心理的快楽主義と倫理的快楽主義との関係について、どのように考えているのであろうか。この点を知る手掛かりになるのは、『功利主義論』第 4 章第 3 節の以下の一節である。

> 何かが望ましいことの与えうる唯一の証拠は、人々が現実にそれを欲しているということである。功利主義の学説がそれ自身に提案する目的が、理論においても実践においても、目的であると認められないとすれば、その目的が目的であると誰かを納得させることができるものは決して無いだろう。(CW 10.234)［強調は引用者］

人々があるものを現実に欲していないとすれば、それが望ましいということを誰かに説得できる証拠は無い。たとえば、人々が自己の幸福を現実に欲していないとすれば、自己の幸福が望ましいということを、誰かに説得できる証拠は無い。

若干敷衍して言えば、第一に、自己や他者の幸福を欲する人が、これまでに誰もいなかったと仮定すれば、自己や他者の幸福が望ましいあるいは善いということを示す証拠は無い。第二に、これまでに生きた大多数の人が、自己や他者の幸福以外の何かを欲するとしても、少なくとも自己や他者の幸福を欲しているという経験的な事実は、自己や他者の幸福が望ま

しいということに対する一応の証拠になる。ミルのように経験論の立場をとれば、こう論じるのは当然である。

第三の論拠について。ミルは、すべての人が他の人々の幸福を欲するという心理的普遍的快楽主義を支持しているだろうか。これについて知る第一の手掛かりになるのは、『功利主義論』第3章第9段落および第10段落の以下の一節である。

> 功利主義道徳のための感情という自然的な基盤が無ければ、このような［義務の感情と功利との：引用者］結び付きは、教育によって教え込まれた後でも、分解し尽くされてしまうということは、十分に起こりうるだろう。
>
> しかし、強力な自然的感情というこの基盤は存在する。この基盤は、いったん社会全体の幸福が倫理の基準として認められれば、功利主義道徳の強みになる。この確固たる基盤とは、人類の社会的感情という基盤である。つまり、同胞と一体化したいという欲求である。この欲求は、すでに人間本性の力強い原理であるうえに、幸いなことには、わざわざ教え込まれなくても、文明進歩の影響を受けてしだいに強くなる傾向を持つものの一つである。（CW10.231）

功利主義道徳の基盤となるのは、同胞と一体化したいという欲求である。この欲求は、人間本性の力強い原理として現実に存在している。

上の一節が功利の原理の「証明」に役立つとすれば、社会的感情すなわち同胞と一体化したいという欲求があるということが、人は他者の幸福を欲するという心理的普遍的快楽主義を述べたものであると解釈する必要がある。こう解釈できるとしても、社会的感情すなわち同胞と一体化したいという欲求があるということは、せいぜい、文明の進歩に応じて、ますます多くの人が、ますます多くの他人の幸福を欲するようになるという、不完全な心理的普遍的快楽主義を意味するにすぎない[10]。すべての人がす

べての他人の幸福を現実に欲しているという、完全な心理的普遍的快楽主義までも意味しない。

では、ミルは完全な心理的普遍的快楽主義が成り立つと考えているのであろうか。これを知る手掛かりになるのは、『功利主義論』第 3 章第 11 節の以下の一節である。

> すべての人が現在でさえ持っている、自分は社会的存在であるという根深い考えによって、人は自分自身の感情や目標と同胞の感情や目標は調和していなければならないということを自らが自然に望んでいることの一つであると考えがちになる。……自分の本当の目的と同胞のそれとは衝突しないこと、自分は同胞が本当に望んでいるもの、つまり彼ら自身の善に反対しているのではなく、むしろそれを促進しているということを意識しなければならない。多くの人にとってこの感情は強度の点で利己的感情より劣っており、まったく欠如していることもしばしばある。（CW 10.233）［強調は引用者］

人は、他者が欲しているもの、すなわち他者の善を欲している。しかしながら、そうした欲求を持たないこともしばしばある。ミルはこう述べている。それゆえ、彼は、完全な心理的普遍的快楽主義を採用していないと言える。

ここで、シジウィックの立場からは、次のように論じられうる。すなわち、仮に、心理的快楽主義に基づいて倫理的快楽主義を正当化できるとしても、倫理的快楽主義を正当化するために必要な前提は、完全な心理的普遍的快楽主義である。不完全な心理的普遍的快に基づいて、倫理的快楽主義を正当化することはできない、と。

他方、ミルの立場からは、次のように論じられうる。すなわち、心理的快楽主義に基づいて倫理的快楽主義を正当化できると仮定すれば、「同胞と一体化したいという欲求が、すでに人間本性の力強い原理であるうえ

に、……わざわざ教え込まれなくても、文明進歩の影響を受けてしだいに強くなる傾向を持つものの一つである」という事実は、倫理的普遍的快楽主義を支持する十分な証拠になる、と。

どちらの立場が説得力を持つだろうか。先に述べたように、これまでに生きた大多数の人が自己の幸福や他者の幸福を欲しているという事実は、自己の幸福や他者の幸福が（各人にとって）望ましいという一種の倫理的快楽主義を支持するかなり強い証拠になる。それゆえ、功利の原理のミルによる「証明」は一定の意義を有していると言える。他方、文明の進歩に応じて、ますます多くの人がますます多くの他人の幸福を欲するようになるという不完全な心理的普遍的快楽主義は、社会全体の幸福すなわちすべての人の幸福が（各人にとって）望ましいという倫理的普遍的快楽主義を支持する不十分な証拠にしかならない[11]。それゆえ、ミルによる「証明」は、やはり十分なものとはいえない。

## おわりに

シジウィックは、質的快楽主義、心理的快楽主義、功利の原理の「証明」に関するミルの見解を、以下のように批判している。

（1）質的快楽主義について。一方の快楽は他方の快楽より一層快くないが質の点で優れているという理由で後者を選ぶとすれば、快楽主義の中に、それと整合しない非快楽主義的な要素を持ち込むことになる。また、二つの快楽のうち、より少ない方を、それが質の点で優れているということに基づいて選択することと、最大の幸福（快楽）を選択の基準と見なすこととは整合しない。

（2）心理的快楽主義は誤りである。

（3）シジウィックがミルによる功利の原理の「証明」を批判する論拠は、以下の三つである。第一に、心理的快楽主義はそもそも誤りである。第二に、心理的快楽主義と倫理的快楽主義との間にはいかなる必然的な関

係もない。第三に、仮に、心理的快楽主義に基づいて倫理的快楽主義を正当化できるとしても、倫理的普遍的快楽主義を正当化するために必要な前提は、心理的普遍的快楽主義である。しかしながら、心理的普遍的快楽主義は成立しない。

上の批判に、次のように応えた。

（1）質的快楽主義について。第一に、一方の快楽は他方の快楽より快くないが質の点で優れているという理由で前者を選ぶことは、完全な快楽主義とまったく矛盾しない。第二に、ミルが最大化することを目指す量とは、快楽の量（quantity）ではなく、快楽の価値である。こう解釈すれば、快楽の価値の最大化を選択の基準とすることと、量（quantity）が少ないほうの快楽を、それが質の点で優れているという理由で選択することとまったく矛盾しない。

（2）心理的快楽主義が誤りであることを示すためにシジウィックが挙げている論拠は、どれも十分なものではない。さらに、ミルの見解の中に見出される心理的快楽主義は説得的である。

（3）功利の原理の「証明」について。第一に、上で見たように、心理的快楽主義は誤りとは言えない。第二に、心理的快楽主義と倫理的快楽主義との間には、前者が後者の証拠になるという関係がある。第三に、仮に、心理的快楽主義が倫理的快楽主義を支持する論拠になるとしても、倫理的普遍的快楽主義を支持する十分な論拠になるのは完全な心理的普遍的快楽主義である。不完全な心理的普遍的快楽主義だけでは、倫理的普遍的快楽主義を支持する十分な論拠にならない。

上述のように、ミルの質的快楽主義と心理的快楽主義は、シジウィックによる批判に応えることができるが、ミルによる功利の原理の「証明」は、シジウィックによる批判に応えることができないということを明らかにした。

（みずの・としなり　慶應義塾大学文学部非常勤講師）

# Sidgwick's criticism on Mill's "utilitarianism"

Toshinari MIZUNO

Sidgwick criticizes Mill's utilitarianism, first of all on his qualitative hedonism: If he prefers less pleasure to more pleasure because the former is better in terms of quality, he introduces non-hedonistic elements into hedonism. In addition, preferring less pleasure to more pleasure is not consistent with the standard of preference to seek for the greatest amount of pleasure. Second, Mill's psychological hedonism is false. Third, Mill's "proof" of principle of utility is not plausible.

I argue that, while the third criticism is plausible, the first and second criticisms can be debated from Mill's viewpoint. (1) For the first criticism, Mill first holds that the value of pleasures is determined by both their quantity and quality. If this view is valid, preferring less pleasure to more pleasure because the former is better in quantity is consistent with hedonism. Second, the amount that Mill aims at maximizing is not the quality of pleasure but the value of it. Therefore, preferring less pleasure to more pleasure is consistent with the standard of preference to pursue the greatest amount of pleasure. (2) With regard to the second criticism, the grounds upon which Sidgwick's arguments are built with regard to psychological hedonism being false are insufficient. Rather, I argue that Mill's psychological hedonism is plausible.

---

＊　ミルの著作からの引用はすべて、*Collected Works of John Stuart Mill*, 33 Vols., Robson, J.M. general ed., Toronto and London: Toronto University Press and Routledge, 1965-91 から行う。本文中の引用は、略号 CW、巻数、頁数の順に記す。なお、訳出に際しては、以下の文献を適宜参照した。伊原吉之助訳「功利主義論」、関嘉彦編『ベンサム　J・S・ミル』中央公論社、1979 年、川名雄一郎、山

本圭一郎訳『Ｊ・Ｓ・ミル　功利主義論』京都大学出版会、2010 年、山下重一訳注『評注　ミル自伝』御茶の水書房、2003 年。

本稿で用いる他の略号は以下の通り（略号の後の数字はいずれも頁数を表す）。

ME　Henry Sidgwick, *The Method of Ethics* [1874], 7th ed. [1907], Macmillan, 1907; Hackett, 1981

OHE　Henry Sidgwick, *Outline of the History of Ethics for English Readers* [1886], Macmillan; Cambridge University Press, 2002

1　質的快楽主義、心理的快楽主義という言葉をミルは用いていないが、それらの見解は、彼の議論の中に見出される。

2　詳しくは、水野俊誠『Ｊ．Ｓ．ミルの幸福論――快楽主義の可能性』第 2 章、参照。

3　泉谷周三郎「Ｊ．Ｓ．ミルの功利主義とシジウィク」行安茂編『H．シジウィク研究――現代正義論への道』以文社、1992 年、参照。

4　Cf. Crisp, R., *Routledge Philosophy Guidebook to Mill on Utilitarianism*, Routledge, 1997. 泉谷周三郎「ジョン・スチュアート・ミルによる快楽の量と質との区別について」『哲学倫理学研究』第 100 号、1975 年、参照。

5　これに対してバトラーによれば、空腹という欲求の対象は食物という事物である（Cf. Butler J., *The Works of Joseph Butler, Vol.2*, W. E. Gladstone ed., Clarendon Press, 1896;reprint, Thoemmes Press, 1995, p.40）。

6　Cf. Crisp, R., *op.cit.*. 泉谷、前掲書、参照。

7　水野、前掲書、第 4 章、参照。

8　Cf. Crisp, R., *op.cit.*. 水野俊誠「快楽の質に関する J.S.ミルの見解について」『エティカ』第 2 号、2009 年、参照。

9　デイヴィッド・Ｊ・リンデン、岩坂彰訳『快感回路――なぜ気持ちいいのかなぜやめられないのか』河出書房新社、2014 年、第 1 章、参照。

10　同胞と一体化したいという欲求とは、現実には、家族、友人、せいぜい同じ組織や国に所属する人々と一体化したいという欲求である。人類の全員と一体化したいという欲求は、人間本性の中には存在しないし、それを現実に持つ人はほとんどいない。

11　ミルは、ヘンリー・ジョーンズへの手紙の中で次のように述べている。「あなたが私の『功利主義論』から引用する文に関して、社会全体の幸福が全員の集まりにとって善であると私が言ったとき、すべての人の幸福が他のすべての人にとって善であることを私は意味しなかった。社会と教育の善い状態において、

それが成り立つだろうと私は考えるのだが。私はこの特定の文で、Aの幸福が善であり、Bの幸福が善であり、Cの幸福が善である等なので、これらの善の総和は善でなければならないと論じようとしただけである。」（CW 16.1414）全員の幸福が各人にとって善であるのではない。各人の幸福が善であるので、これらの善の総和はやはり善である。各人の幸福がそれ自体として善であるとすれば、各人の善の総和もやはりそれ自体として善である。だとすれば、すべての人は、各人の幸福の総和をもたらす行為を選択すべきである。これは、功利の原理をまさに述べたものである。以上のような功利の「証明」は、シジウィックによる批判を免れている。

しかしながら、功利の原理を証明するために、ミルが証明しなければならなかったことは、彼がそれをしなかったと述べていること、すなわち「すべての人の幸福は他のすべての人にとって善である」ということである。すべての人の幸福が他のすべての人にとって善であるということまでも証明しなくてすむとミルが考えているのは、彼が自己の善と他者の善とが対立しうるという事実を深刻に捉えていないからある。他方、『功利主義論』第4章では、「すべての人の幸福が他のすべての人にとって善である」ということをミルが証明しようとしていると解釈する余地がある。